

「行為」・「行動」という用語の神経心理学的使用法について

望 月 聡*

拝啓

本誌1996年第3号に掲載されました「編集者への手紙」欄、「前頭前野病変による行為障害：模倣行動とは？」(下村氏ら)、および河村氏からの返書を拝読いたしました。imitation behavior の定義・誘発方法・判断基準について、大変興味深い議論が交わされております。

しかし、この議論の根本にある問題は、症候そのものというよりは、むしろ「行為」という用語、「行動」という用語をいかに用いるべきかという点にあるのではないのでしょうか。一般的には明確な区別なく用いられるこれらの用語が、神経心理学的観点からはどのように用いられることが望ましいのか、無用な混乱や誤解を避けるために、明確な区分を試みる必要があるのではないかと考えます。

私の知る限りでは、行為・行動という用語そのものおよびその使用法に関するまとまった考察がなされている書物は残念ながら存在しません。したがってまず、思いつくままに、これらの用語の使用法について列挙してみようと思います。これらの用語の使い方としては、少なくとも七つの「軸」が存在すると思われまます。いずれも「行動」のうち、ある観点の軸から眺めたとき特別な範疇に含まれるものを「行為」と呼ぶように思われまます。

1. 意図(意志)にもとづく個体の動作を「行為」とし、意図(意志)の有無や関与にかかわ

らず個体の動作全般を「行動」とする〈意図性の軸〉；

2. 個体の能動的・主体的動作を「行為」とし、受動的・反動的動作を「行動」とする〈能動性の軸〉；

3. 身体のある一部分を用いる、個体の局所的動作を「行為」とし、より全身的・全体的動作を「行動」とする〈動作主の身体に関する局所—全体性の軸〉；

4. 行われる個々の動作そのものを「行為」とし、行われる個々の行為の集合の結果として表現されるものを「行動」とする〈動作—結果性の軸〉；

5. 行われる個々の動作自体を「行為」とし、そのような「行為」のなされる様式、ふるまい方を「行動」とする〈動作—様式性の軸〉；

6. 個体の動作を「行為」とし、社会・集団における社会的意味を持つ動作を「行動」とする〈個—集団性の軸〉；

7. 広くヒトの行う動作について「行為」とし、ヒト以外(少なくとも霊長類以外)の動物の行う動作を一般的に「行動」とする〈ヒト性の軸〉；

さしあたりヒトの動作に限定して考えてみることにすると(〈ヒト性の軸〉の除外)、客観的に明確に区分するために必要なことは、

I. 観察に基づいて評価が可能なもの、すなわち脳内の神経解剖学的、あるいは(神経)心理

1996年12月4日受理

"Action" and "Behavior" in Neuropsychological Terminology

*東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系, Satoshi Mochizuki : Department of Life Sciences, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

学的メカニズムに依存しない

II. (観察者や動作主の視点からの) 動作のなされる環境や状況に依存しない

III. (観察者や動作主の視点からの) 動作の持つ「意味」に依存しない

ことであると考えます。

このような観点から先の七つの軸について考えると、〈動作主の身体に関する局所—全体性の軸〉による区分にしたがって「行為」／「行動」という用語を用いることがもっとも客観性が高く、かつ明確であると考えられます。

上に述べましたものは、ひとつの「考え方」を示したものであり、完全なものであるとは思いません。また、このように区分することそのものについて、あまり意義を感じない方もいらっしゃるかもしれません。しかし、科学としての「神経心理学」として、また研究者間の学問的コミュニケーションを円滑に進めるためにも、用語の明瞭な定義が必要であると考えます。

広く諸先生方のご意見を伺いたく存じます。

敬具